

「北海道農業」特集のことば

北海道支所の設置は官制上は昭和二十三年九月となつてゐるが、實際に研究に従事するようになったのは翌年初めであつて、そのときの研究員は四名である。この年の夏に開所式を挙げるため短期間にまとめたのが、最初の業績ともみるべき「北海道農業の展開」と題する研究である。この当初の研究活動を顧みると、そこに一貫した方針がなかつたかのように考えられるかもしれないけれども、われわれとしては次の二つの問題をどのようにとりあげていこうかということに、焦点をあわせたつもりなのである。一つは北海道経済における農業の地位とか役割とかいう問題であり、他の一つは、日本農業における北海道農業の特殊性という問題である。これら二つの問題は相互に密接な関連性をもつていて、これをきり離してしまうことは困難とも考えられるが、一応便宜的に区別して見たのである。初めの問題提起についていえば、道経済にしめる農業其他の原始産業の地位は、工鉱業にその席をゆずつて第二位となっているが、工鉱業との経済的関連性は、充分に明かにされていない点が尠くない。例えば工鉱業労働力の給源としての農業や農村の意義にかんする問題を始め、農産物を原料とする工業の企業的側面などは道外に本社を有するために調査が容易でない場合が多い。財政や金融と農業の問題となると、更にその困難は倍加してくる。農業における財政投資の経済的効果など重要な問題であるが、そういう財政投資のメカニズムといったものすら現在の段階ではこれを正確に把握することは、全く困難という外はない。こういう問題はいくつも考えられるが、われわれにとつて最も緊急を要する問題は、二次産業の発展の可能性という点である。このような産業構造上の問題は、国又は道の政策的要

請にかなり左右されてくるので、こういう側面の動向がはつきりしなければ、農業の動向も、ひいては道経済にしめる農業の地位も論じられないのではないかと言うのが、われわれの現在の見解であると言つてよい。そういう意味で、この第一の問題提起は政策的与件を除外しては論じえないという大きな困難に直面しているわけである。

第二の問題は府県農業に比べて見た北海道農業の特殊性ということであるが、この場合には自然的技術的水準から見た特殊性ということよりも、寧ろ社会的經濟的水準から見た特殊性ということが基本的な問題である。従つて水田農業よりも畑作農業が視野の中心におかれ、水田農業の場合においても、田畑輪換というような高度の技術水準がとりあげられることになる。畑作農業における特殊性は、市場関係や価格變動乃至は景氣變動のような純粹の經濟関係が、長期的もしくは短期的にどのような影響を与えるか、とくに経営主体のメンタリティーに及ぼす影響はどうかというような問題が提起されなければならないのである。こういう問題は労働の生産力の比較という問題などよりも、はるかに多くの困難な問題を含んでいるものである。蓋しこのような市場の形態はいろいろの意味において競争が不完全であるからである。それにも拘わらず資本主義的商品生産機構が徐々に形成されつつあるという意味で、その機構の外延と内包の把握が、今後に残されている大きな問題であると認めざるをえないのである。

凡そこのような二つの問題意識は、支所開設当初からのわれわれの脳裡にきざまれていたものであつて、今日と雖もこの考え方に渝りはないわけである。研究員の誰しもがいだいているこのような問題提起を、どのような形で解明していくかは、勿論研究員各自の個別的な問題とも言えるが、支所全体としても、できるだけすつきりした形でこれらの問題のアプローチを整理していきたいというのが、われわれのいつわらざる念願でもある。

本書に収録した五つの論稿は、いわばこのような苦しい思考摸索の過程の所産の一つに外ならないものである。こ

これらの論稿の内容のもつ成果は、それぞれ専門のエキスパートによつて批判していただくわけではないが、論文そのものもつ現段階的意義は正しく以上にのべた問題提起の範疇をいするものではない。支所開所五周年を記念する論文集としては、たしかに粗笨を免れえぬものと言わなければならぬが、これを契機としてわれわれは次の新しい段階に進みたいと考えている次第である。

昭和三〇年一月

北海道支所長 伊藤 俊夫